平成 24 年 6 月 15 日

「ＪＡネットワーク十勝」の取り組みについて

十勝農業協同組合連合会

電算事業部長 高 橋　 敏

■ 十勝の概要

【地域環境】

- 十勝支庁は北海道の東部に位置し、西に日高山脈、北に大雪山系、南・東は太平洋に接している。東西約 90km、南北約 120km。
- 1 市 16 町 2 村で構成され、中央部に帯広市（人口 16 万 8 千人）がある。十勝全体の人口は約 35 万人である。
- 夏季は比較的暖かく、最高気温は 30℃を超えることも珍しくないが、冬季の寒さは厳しく、マイナス 20℃以下になることもある。
- 冬季は晴天に恵まれ、年間の日照時間は北海道で最も長いが、作物の生育期には低温・少照に見舞われることも多く、特に沿岸・山麓の地域はその傾向が強い。
- 明治 16 年に開拓の鍬が下ろされたが、道内の他地域とは異なり、屯田兵ではなく民間の手によって開拓が進められたのが特徴である。

【農業の特徴】

- 水田は極めてわずかで、耕地の 99%は畑地、牧草地である。
- 農家のほとんどが主業農家であり、平均耕地面積は約 38ha でＥＵと同程度。
- 主な品目は、小麦・てんさい・馬鈴しょ・豆類・野菜（スイートコーン、にんじん、ながいも他）、酪農・畜産では、生乳・肉畜（ホル牡・和牛・豚・鶏）である。
- ここ数年間の農業産出額は 2,500～2,600 億円で、岩手県（全国 11 位）に匹敵する。農家 1 戸当りの販売額は 3,500 万円、農業所得は 1,300 万円である。

【農協組織】

- 十勝管内には 24 総合農協と、それらを会員とする地区連合会（十勝農協連）がある。
- 北海道内の農協数は合併の取り組みが開始された平成 6 年度に比べて半減し、110 となったが、この間、十勝管内では 2 農協による合併が 2 ケース行なわれたのみである。
- 農協事業は、農業生産に関わる部門（営農指導・販売・購買）に大きなウエイトが置かれている。
- 農協は互いに競い合うという気質を色濃く持つものの、一方で結束力も兼ね備え、時に全ての農協が一体となって強い力を発揮する。
- 「ＪＡネットワーク十勝」設立前から農協事業の共同化が進められてきた。

  小麦積み出し用港湾サイロ・馬鈴しょ澱粉工場（3 ヶ所）・青果物共同選別施設（11 品目 17 ヵ所）・農業情報システム・土壌・飼料・生乳分析施設・化成工場

■ JAネットワーク十勝の設立経過

(1) 十勝１ＪＡ構想の表明（平成 6 年）

① 北海道農協大会において十勝管内１ＪＡ構想を掲げる。

② 付帯事項として、「１ＪＡ構想は将来目標とし、当面は並立ＪＡの解消を優先して段階的に推進する」とした。

(2) ブロック別組合長会議の実施（平成 12 年）

① 管内３ブロックに分かれ、合併の必要性・目標、１ＪＡ構想、事業共同化などについて協議した。

② 協議結果に基づき、検討委員会を設置することとした。

(3) 十勝地区ＪＡ組織整備検討委員会の設置（平成 12 年）

① 将来を見据え、管内ＪＡが組合員のために行なうべき業務を、どのような方法・形態で行なうべきかについて検討する目的で設置。

② 現状把握、ＪＡ組織整備の基本方針および、具体的な実践方法を検討事項とした。

③ その後、合併ありきの流れに異論を持つ研究者の存在を知り、十勝の全組合長が揃って國學院大學の三輪昌男教授の元を訪れ、ネットワークの概念について指導・提案をいただいた。その結果、十勝の考え方と相通ずるものがあることから、合併ではなく、ネットワークの構築によって事業を強化していくという基本路線を固めた。

(4) ＪＡネットワーク十勝の発足（平成 13 年）

① 組織化の前提
- 将来とも組合員の営農・生活の支援に役立つ組織であること。
- 将来の１ＪＡに対応するため、各ＪＡは経営の自己責任を基本として事業収支の改善と財務の健全化を図ること。
- 十勝のスケールメリットを生かして効率化を図ること
- 職員の活性化を図ること

② 目標とする組織の形
- 将来的には十勝１ＪＡを目指すが、当面は各ＪＡの経営基盤の強化と機能の効率化を目標とし、既存ＪＡを基幹として事業の機能統合を図るネットワーク型のＪＡグループを構築する。
- 本部機関として、ＪＡネットワーク十勝本部を設置する。

③ 合併でなく、ネットワーク型組織を選択する理由
- 直ちに１ＪＡを志向した場合、個々のＪＡの特色がなくなる恐れや、組合員に密着した活動が停滞する可能性があるため。
- また、部分合併のみを志向した場合には十勝のスケールメリットを発揮しづらくなるため。

■ JAネットワーク十勝の基本精神

1. JAネットワーク十勝の基本精神

(1) 先人から受け継いだ十勝の気質「自主独立とパイオニア精神」を大切にして、互いに競い合うことにより生まれる協同の精神と力を益々強固なものに育て、豊かな農業と農村づくりを推進する。

○ ＪＡネットワーク十勝は、「十勝」が培ってきた成果と活力をさらに高め、日本農業の中核をなす地域として、常に自己改革の下でＪＡ組織への信頼を高める体制づくりを目指す。

(2) ＪＡの意志が尊重されることを原則とし、協同組合の基本理念に基づいた事業推進により、ＪＡと組合員の結集による利益還元を基本とした義務履行型のスケールメリット発揮を目指す。

○ ＪＡネットワーク十勝は、あくまでも農業生産を基本に置いた十勝型の事業展開を目指す組織である。

○ ＪＡネットワーク十勝は、各ＪＡが自己責任で主体的に運営する組織である。

○ ＪＡネットワーク十勝は、単に企業の合理化を真似るのではなく、協同組合精神に基づいてＪＡ事業の再構築を行なう組織である。

(3) 組合員－ＪＡ－役職員という、三位一体の尊重精神を遵守する。

○ ＪＡネットワーク十勝は、組織の活性化を通して人づくり、地域づくりを目指す。

2. JAネットワーク十勝の目的

(1) ＪＡの財務状況を公正に評価する基準づくりとその実践により、管内ＪＡの財務体質を強化する。

(2) 管内ＪＡの組織力結集によりスケールメリットを生かした協同事業を行ない、十勝農業の生産性向上とコスト低減に努めるとともに、ＪＡ事業の効率化を図る。

(3) 以上により、組合員の営農と生活の向上を支援する組織活動を強化し、さらには十勝１ＪＡの意識統一のための基盤づくりを行なう。

3. 十勝1JAに関する基本姿勢

(1) ＪＡ合併は、あくまでもＪＡ事業の伸長とコスト低減を図り、組合員メリット増大を実現するための「手段」であって、「目的」ではない。

(2) したがって、ＪＡネットワーク十勝は「合併ありき」ではなく、ネットワーク事業を一つ一つ積み重ねる中から十勝１ＪＡへの意識統一を進めることを基本とする。

(3) つまり、全ＪＡの財務基盤が健全な水準に達し、さらにはＪＡ間共同事業で規模の有利性が具体的に発揮されることによって大同団結の意識が高まり、その結果、ＪＡ事業の一層のレベルアップという明確な目標の下で十勝１ＪＡに移行することを最も理想とする考え方である。

(4) ただし、部分的な合併が必要と判断される場合は先行して実施されることも有り得る。

■ JAネットワーク十勝の取り組み内容

Ⅰ．農協財務健全化の推進

財務・自己査定に係る十勝基準（抜粋）			未達成農協数	
			平成 13 年度	平成 22 年度
1	自己資本比率	10%以上	0	0
2	貸倒引当金	満度引当	9	0
3	分類債権比率	20%以下	8	3
4	退職給付引当	満度引当	１２	0
5	固定比率	100%以上	3	0
6	農地掛目	70%以下	3	0
7	家畜掛目	50%以下	4	0

Ⅱ．ＪＡ間共同事業の推進

１．管理・共済部門

(1) 財務健全化基準の設定と、自己査定基準の統一
(2) 共通顧問税理士の設置
(3) 内部審査員の配置
(4) 事務用品の一括発注
(5) 自動車事故処理の専任グループ化

２．購買部門

(1) 肥料・農薬・飼料などの生産資材の低価格化と系統シェア向上
(2) 燃料配送の共同化

３．農産部門

(1) 農産施設の共同利用
(2) 農産物トレーサビリティー体制および、残留農薬検査体制の整備
(3) 生馬鈴しょ輸入解禁に関する対策組織の設置

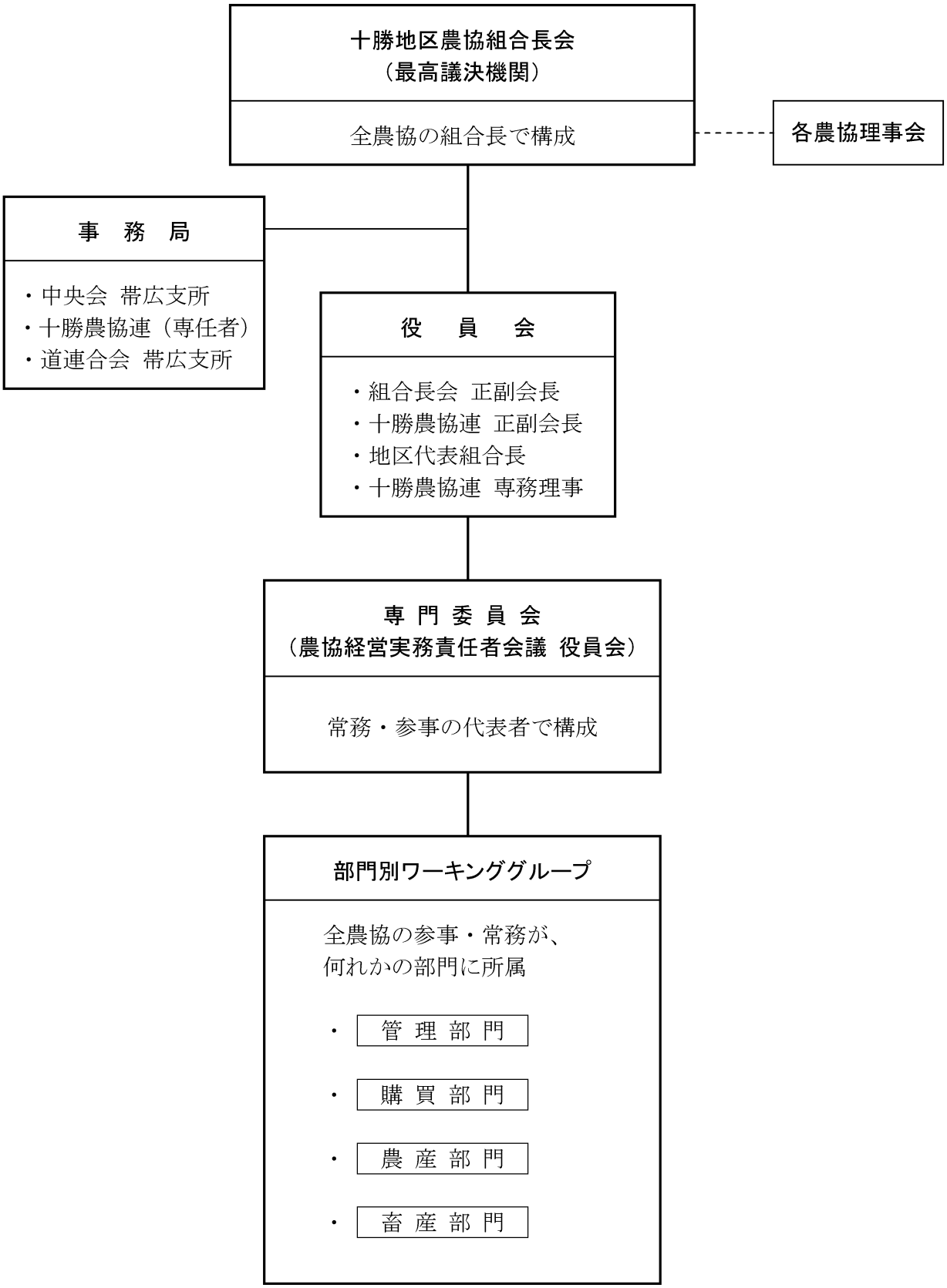
４．畜産部門

(1) 乳質検査の迅速化
(2) 和牛肥育振興
(3) 畜産物のトレーサビリティー体制の整備
(4) 広域フィールドアドバイザーの配置

■ 今後の課題（事務局担当者として）

１．営農指導の強化を意識した共同事業の推進
２．組合員負担の一層の低減に向けた共同事業の具体化
３．農協の適正規模など、将来を見通した組織のあり方の検討

■ JAネットワーク十勝の運営機構



2 全道・全国に占める十勝農業の地位（平成20年）

項目		単位	十勝	北海道	全道構成比（%）	支庁順位	全国	全国構成比（%）
総土地面積		千ha	1,083.1	8,345.6	13.0	1	37,793.0	2.9
耕地面積		千ha	255.2	1,162.0	22.0	1	4,628.0	5.5
	うち田	千ha	0.8	226.0	0.4	11	2,516.0	0.0
	うち畑	千ha	254.4	936.0	27.2	1	2,112.0	12.0
耕地率		%	23.6	14.9	－	1	12.2	－
1戸当たり耕地面積		ha	37.8	19.7	－	4	1.6	－
総農家戸数（H17）		戸	6,743	59,108	11.4	3	2,848,166	0.2
販売農家戸数（H17）		戸	6,596	51,990	12.7	3	1,963,424	0.3
	うち専業農家戸数	戸	4,811	27,120	17.7	1	443,158	1.1
	専業農家率	%	72.9	52.2	－	3	22.6	－
	うち主業農家戸数	戸	5,947	38,201	15.6	3	429,467	1.4
	主業農家率	%	90.2	73.5	－	3	21.9	－
農家人口（H17）		人	31,166	211,929	14.7	3	8,370,489	0.4
農業従事者数（H17）		人	20,749	146,355	14.2	3	5,562,030	0.4
主要作物の作付面積	小麦	ha	46,400	115,700	40.1	1	208,800	22.2
	馬鈴しょ（十勝はH19）	ha	24,100	55,200	－	－	82,000	－
	大豆	ha	4,080	24,000	17.0	3	147,100	2.8
	小豆（十勝はH19）	ha	11,802	23,400	－	－	32,100	－
	いんげん（十勝はH19）	ha	7,584	9,950	－	－	10,900	－
	てんさい	ha	28,500	66,000	43.2	1	66,000	43.2
	サイレージ用とうもろこし（十勝はH19）	ha	16,192	43,300	－	－	90,800	－
	牧草（十勝はH19）	ha	71,522	558,000	－	－	769,000	－
主要作物の収穫量	小麦	t	233,100	541,500	43.0	1	882,400	26.4
	馬鈴しょ（十勝はH19）	t	959,000	2,131,000	－	－	2,697,000	－
	大豆	t	9,400	56,800	16.5	3	261,700	3.6
	小豆（十勝はH19）	t	32,102	61,300	－	－	69,300	－
	いんげん（十勝はH19）	t	17,117	23,400	－	－	24,500	－
	てんさい	t	1,834,000	4,248,000	43.2	1	4,248,000	43.2
乳牛飼養頭数（十勝はH19）		頭	215,100	819,400	－	－	1,533,000	－
肉牛飼養頭数（十勝はH19）		頭	196,300	511,300	－	－	2,890,000	－
生乳生産量（受託乳量）		t	1,039,407	3,784,705	27.5	1	－	－
農協取扱高（概算）		億円	2,463	－	－	－	－	－
	耕　種	億円	1,203	－	－	－	－	－
	畜　産	億円	1,260	－	－	－	－	－

※北方四島は、総土地面積には含むが耕地面積には含まない。耕地率算定に当たっては北方四島を除いて算出。

注：1）小豆・いんげん・サイレージ用とうもろこし・牧草は、十勝支庁農務課調べ。

2）生乳生産量は、ホクレン受託乳量。

3）その他は、農林水産統計。

北海道JA合併構想に基づく合併実績

JAグループ北海道のJA合併構想の取り組みの経過

第19回JA北海道大会(昭和63年11月10日)において、「新しい組織づくりと活力ある農協経営の創造について」を決議し、全道76農協を目標とする全道農協合併目標を設定しました。

その後、第21回JA北海道大会(平成6年11月10日)で「強靱な組織・経営基盤の確立と事業機能の強化」を決議し、各地区でのJA合併構想の見直し協議を基に北海道「新・JA合併構想」(全道37JA構想)を設定しました。

昭和63年度末に全道で256JAあり、JA合併構想の実現に取り組んだ結果、現在は全道110JAとなっています。

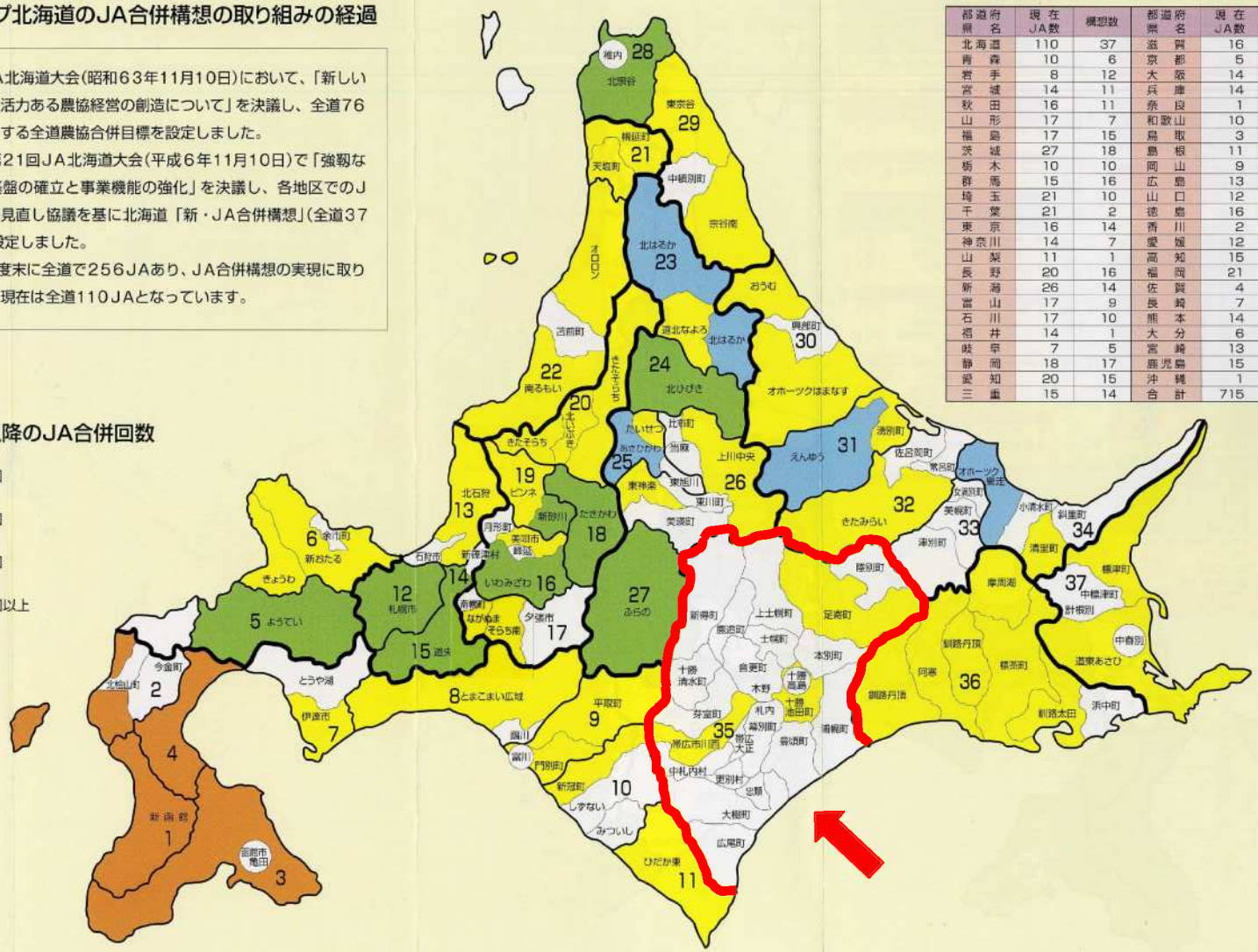
全国のJA合併進捗状況

(平成23年4月1日現在)

都道府県名	現在JA数	構想数	都道府県名	現在JA数	構想数
北海道	110	37	滋賀	16	7
青森	10	6	京都	5	5
岩手	8	12	大阪	14	13
宮城	14	11	兵庫	14	7
秋田	16	11	奈良	1	1
山形	17	7	和歌山	10	8
福島	17	15	鳥取	3	3
茨城	27	18	島根	11	9
栃木	10	10	岡山	9	8
群馬	15	16	広島	13	8
埼玉	21	10	山口	12	11
千葉	21	2	徳島	16	1
東京	16	14	香川	2	1
神奈川	14	7	愛媛	12	10
山梨	11	1	高知	15	8
長野	20	16	福岡	21	3
新潟	26	14	佐賀	4	1
富山	17	9	長崎	7	7
石川	17	10	熊本	14	11
福井	14	1	大分	6	12
岐阜	7	5	宮崎	13	11
静岡	18	17	鹿児島	15	12
愛知	20	15	沖縄	1	1
三重	15	14	合計	715	436

平成元年以降のJA合併回数

- は1回
- は2回
- は3回
- は4回以上



十勝管内24農協の概況

	農　協	正組合員	正職員	出　資　金		販売支払高		生産資材供給高		貯金残高
		(戸)	(人)	(千円)	1戸当り	(千円)	1戸当り	(千円)	1戸当り	(千円)
1	帯広かわにし	554	98	2,198,957	3,969	20,128,266	36,333	10,808,000	19,509	80,453,196
2	帯広大正	318	46	1,307,550	4,112	13,062,460	41,077	3,752,099	11,799	20,949,325
3	中札内村	169	78	1,028,860	6,088	8,307,840	49,159	1,864,352	11,032	20,429,794
4	さらべつ	238	64	779,790	3,276	9,215,704	38,721	4,059,002	17,055	25,584,059
5	忠類	98	41	513,378	5,239	4,435,012	45,255	2,214,854	22,601	6,723,617
6	大樹町	180	81	899,819	4,999	11,539,778	64,110	5,340,969	29,672	16,100,328
7	ひろお	125	45	444,333	3,555	4,891,275	39,130	2,975,210	23,802	6,132,812
8	めむろ	661	113	3,941,304	5,963	20,787,860	31,449	9,774,113	14,787	54,127,894
9	十勝清水町	383	111	1,693,119	4,421	17,120,068	44,700	7,019,460	18,328	22,441,499
10	新得町	134	41	632,916	4,723	9,929,092	74,098	3,649,291	27,234	14,129,002
11	鹿追町	275	88	997,825	3,628	14,995,840	54,530	7,507,460	27,300	31,230,907
12	木野	192	46	2,147,501	11,185	2,593,622	13,508	1,806,369	9,408	23,006,557
13	おとふけ	608	91	2,411,439	3,966	18,069,529	29,720	7,150,723	11,761	45,457,200
14	士幌町	436	120	6,095,330	13,980	29,114,996	66,778	12,330,969	28,282	78,295,068
15	上士幌町	172	46	842,636	4,899	13,536,948	78,703	4,660,379	27,095	16,042,449
16	さつない	193	35	746,515	3,868	4,125,270	21,374	1,396,782	7,237	15,096,029
17	幕別町	310	93	2,090,620	6,744	14,378,463	46,382	5,595,363	18,050	23,406,787
18	十勝池田町	244	46	1,328,034	5,443	4,313,194	17,677	2,247,540	9,211	13,178,331
19	十勝高島	121	30	473,705	3,915	2,165,727	17,899	920,419	7,607	5,303,920
20	豊頃町	200	69	1,216,570	6,083	9,499,588	47,498	4,510,518	22,553	14,772,778
21	うらほろ	237	62	1,020,613	4,306	8,446,345	35,639	3,698,837	15,607	14,277,871
22	本別町	358	65	1,906,560	5,326	9,636,179	26,917	4,105,675	11,468	21,355,077
23	あしょろ	250	40	883,240	3,533	7,990,519	31,962	4,035,120	16,140	14,641,560
24	陸別町	96	20	320,338	3,337	4,140,039	43,125	2,024,554	21,089	6,088,644
	合　計	6,552	1,569	35,920,952	5,482	262,423,614	40,052	113,448,058	17,315	589,224,704
	平　均	273	65	1,496,706		10,934,317		4,727,002		24,551,029

資料：平成22年度JA要覧（北海道中央会 帯広支所作成）

※販売支払い額には、水田・畑作経営所得安定対策交付金および生乳補給金を含む

農産部

1. 総合的な土づくり対策の推進
2. 安全･良質な農産物生産と環境保全対策の推進
3. 生産性向上とコスト低減対策の推進
4. 畑作経営支援と新規作物の導入対策の推進
5. 純系無病種苗の普及拡大と安定供給
6. 種苗の生産団地の育成強化
7. 種苗の圃場管理と品質管理対策の推進
8. 豆類種子の調整ならびに備蓄
9. 小麦種子の調整ならびに消毒
10. 根粒菌等の有用資材の開発･製造･普及
11. 組織培養種苗の生産配付
12. 飼料･土壌･作物体･堆肥の分析
13. 農産物の残留農薬自主検査
14. 病害虫の検診

シードセンター

農産化学研究所

まめぞう

病害虫検診点数（平成22年度）	
一般病害虫	200点
ながいも･ヤマノイモウイルス	95点
線虫	719点
ジャガイモシストセンチュウ	2,530点
小麦DON	105点
馬鈴しょそうか病	646点

ウイルス病次代検定個体数（平成22年産）	
種馬鈴しょ	22,769個

組織培養種苗供給数量（平成22年度）
118,240個

残留農薬検査点数（平成22年度） ※オプション検査も含む
10,329点

ネフエール

豆の応援団

堆肥にポ～ン(リン溶解菌)

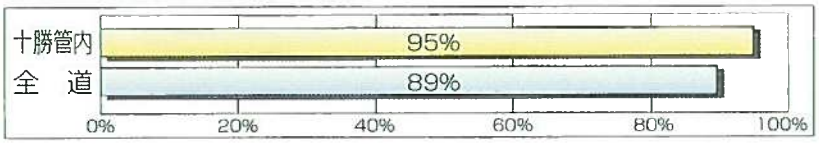
残留農薬自主検査

土壌･飼料分析

主要畑作物種子配付数量（平成22年度）

作物名	配付数量(t)
馬鈴しょ	23,671
豆類	1,448
秋播小麦	4,425

豆用根粒菌普及率（平成22年度）



土壌･飼料分析点数（平成22年度）　（単位:点）

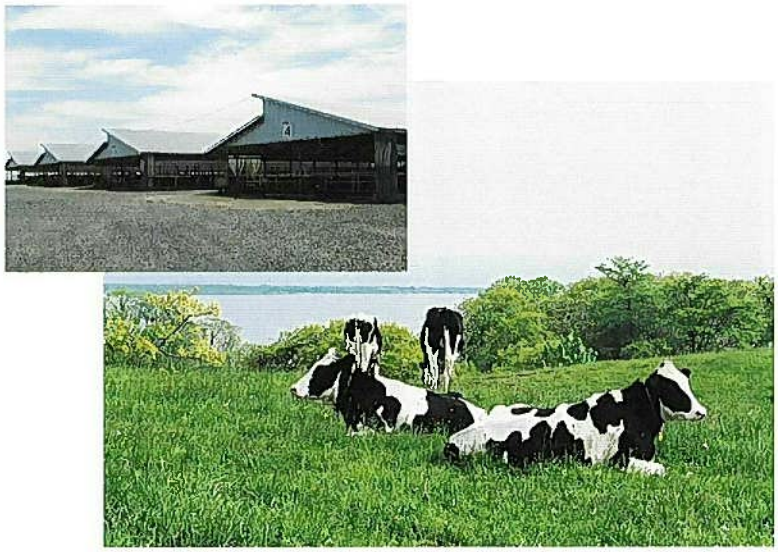
土壌分析		飼料分析					その他分析	
一般分析	微量要素	一般分析	発酵品質	硝酸態窒素	蛋白分画	微量ミネラル	堆肥	作物体
22,458	11,891	13,801	6,591	2,387	2,195	1,007	1,217	3,063

畜産部

1. 酪農・畜産経営技術向上対策と
   十勝産酪農・畜産物の安全対策事業の推進
2. 良質自給飼料の生産性向上と利用対策
3. 乳用牛・肉用牛・馬飼養管理技術普及事業の推進
4. 乳用牛・肉用牛・馬の遺伝資質向上対策事業
5. 家畜糞尿の有効利活用対策
6. 良質生乳生産および乳房炎防除対策事業
7. 生乳分析事業の推進
8. 化成事業の運営・推進
9. 乳牛の預託、育成事業
10. 家畜登録事業

共進会審査風景

生乳分析



湧洞牧場

登録件数(平成22年度)	
乳牛血統登録	42,899件
乳牛体格審査他	27,972件
肉用牛登録	29,197件
種馬登録	548件
種豚登録	611件

生乳検査点数(平成22年度)	
乳成分検査	959,543点
体細胞検査	1,241,613点
細菌数測定	111,004点

化成工場製品製造数量実績(平成22年度)	
肉骨粉類	6,510t
油脂類	5,429t

預託・育成事業(平成22年度)	
預託牛頭数	1,200頭
	(湧洞牧場面積 1,302.69ha)

第1工場

化成工場

第2工場

電算事業部

1. 農畜産物生産履歴記帳システムの運用
2. 組合員情報ネットワーク、マルチメディア農業情報、営農支援システムの運用
3. 農協経営管理システム、組合員システムの機能強化と農協業務の効率化推進
4. 組合員(パソコンクラブ)・農協職員の情報利活用研修の推進

農業情報センター

十勝酪農畜産物生産履歴システム

企画室

1. 『十勝農業ビジョン』の策定ならびに推進
2. 十勝農業に関する情報収集と分析ならびに情報提供
3. 農家経営コンサルタント機能強化に向けた
   支援体制の整備と人材育成
4. 農作業受委託事業をはじめとする
   地域農業支援システムの育成強化
5. 地域農業の担い手育成
6. 海外農業研修視察の実施
7. 『十勝農業賞』の表彰
8. 『JAネットワーク十勝』の事務局業務の推進

十勝における野菜の広域販売体制

平成 23 年 4 月現在

団地名	幹事JA	ブランド名	品　目	参 加 ＪＡ
十勝中央青果団地	音更町、木野、上士幌町、札内、幕別町、本別町、士幌町	十勝の野菜	ダイコン ゴボウ	音更町、木野、札内、 幕別町、本別町
		十勝の野菜	長いも	音更町、木野、上士幌町、 札内、幕別町、本別町、士幌町
	帯広市川西	十勝川西 長いも	長いも	帯広市川西、芽室町、中札内村、 浦幌町、足寄町、新得町、 十勝清水町、十勝高島
	士幌町	士幌町	馬鈴しょ	士幌町、音更町、木野、 上士幌町、鹿追町
	十勝高島	十勝高島	馬鈴しょ	十勝高島、豊頃町
	大樹町	大樹町	ダイコン	大樹町、広尾町
	芽室町	芽室町	ダイコン	芽室町、十勝清水町
	豊頃町	豊頃町	ダイコン	豊頃町、本別町
	新得町	新得町	ニンジン	新得町、十勝清水町、鹿追町
	音更町	十勝の野菜	ニンジン	音更町、芽室町
	芽室町	芽室町	ゴボウ	芽室町、帯広市川西、中札内村、 十勝清水町
	木　野	十勝の野菜	玉ネギ	木野、帯広大正
	音更町	十勝の野菜	玉ネギ	音更町、鹿追町
	幕別町	十勝の野菜	キャベツ	幕別町、上士幌町
	木　野	十勝の野菜	ブロッコリー	木野、音更町、士幌町
	帯広市川西	帯広市川西	Ｇアスパラ	帯広市川西、芽室町、中札内村
	音更町	音更町	Ｇアスパラ	音更町、木野
	中札内村	中札内村	エダマメ	中札内村、帯広市川西
	木　野	木　野	ホーレン草	木野、音更町
	忠　類	忠　類	ユリ根	忠類、更別村、中札内村、幕別町

十勝農業ビジョン2011

～新たな十勝農業の展望～

平成19年4月

JAネットワーク十勝

十勝農業協同組合連合会

Ⅰ．目標と基本姿勢

2011年の目標

農業産出額　2,500億円
（ただし、品目横断的経営安定対策による政策支援額を含む。）

1戸当り農業所得　1,500万円

基本姿勢

1．安全で高品質な農畜産物の安定供給に努め、産地としての信頼を高める。

2．生産コストの低減と生産性の向上を図る。

3．効率的な農業経営を展開し、農家所得の向上を図る。

4．農畜産物の付加価値を高め、基幹産業として地域の発展に寄与する。

十勝農業ビジョン2016

～選ばれる産地を目指して～

■2012年4月■

JAネットワーク十勝

十勝農業協同組合連合会

Ⅰ．目標と基本姿勢

2016年の目標

農業生産額　2,900億円
（農協が取り扱う農畜産物の組合員への販売支払高に戸別所得補償制度等による政策支援額を加えたもの）

基本姿勢

1．ブランド化と高付加価値化を図るとともに、十勝農業のファンづくりを進める。

2．安全安心で高品質な農畜産物の安定供給に努め、産地としての信頼を高める。

3．経営管理を高度化し、生産性の向上と低コスト生産に努め、農業所得の向上を図る。

4．基幹産業として十勝の経済と生活を支え、豊かで潤いのある地域社会の発展を目指す。

帯広市作成「フードバレー十勝」資料より抜粋

十勝のポテンシャル

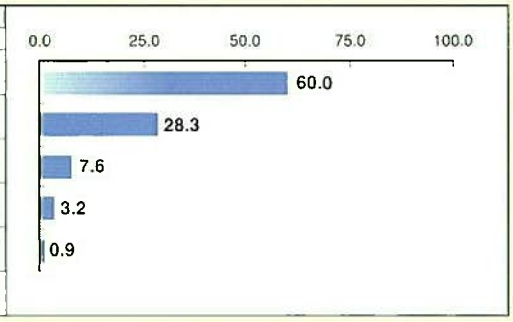
●恵まれた環境力

・全国平均を上回る、年間2,000時間を越える日照時間
・きれいな水・空気などの良質な自然環境
・土壌改良による、農業に適した良質な土壌

年間日照時間（2009年）

※出典:気象庁年報（気象庁）

回答		H23 回答数	H23 構成比
1	そう思う	409	60.0%
2	ややそう思う	193	28.3%
3	あまりそう思わない	52	7.6%
4	そう思わない	22	3.2%
無回答		6	0.9%
合計		682	—

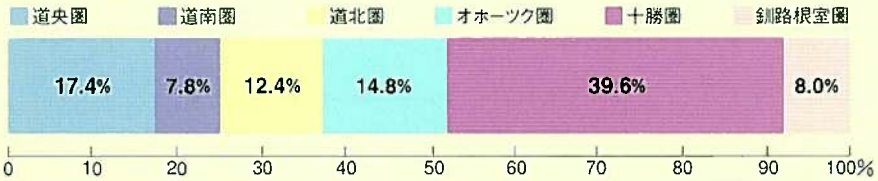


※出典:平成23年帯広市民アンケート「おいしい水道水がいつも安心して利用できる」と感じている割合

●安全安心力・ブランド力

・HACCP対応の選果施設整備
・生産履歴開示の取り組み
・十勝の食＝安全というイメージ（十勝ブランド）

消費者がイメージする食の安全性が高い地域（割合）

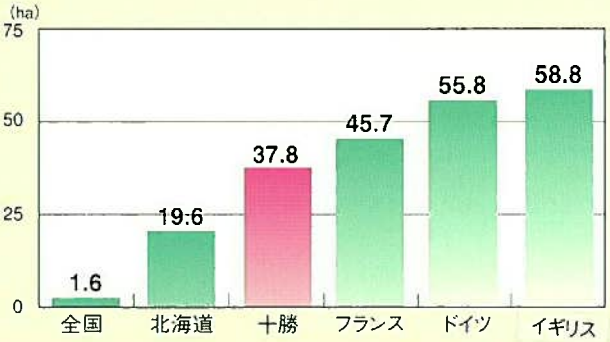


※出典:安心・安全の視点から食の付加価値向上を目指すマーケティング調査分析に関する研究（釧路公立大学）

●豊かな生産力

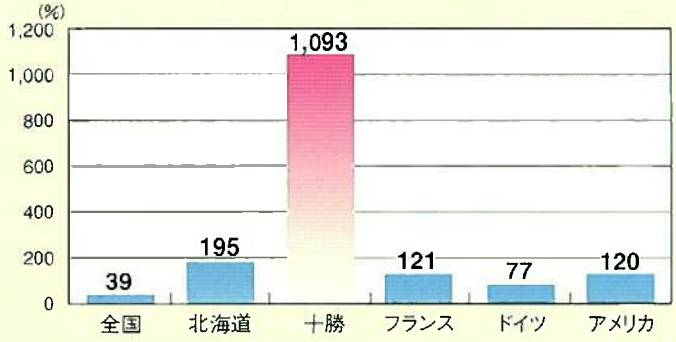
・食料自給率約1,100%、約400万人分の食を担う
・ヨーロッパの農業国に匹敵する、1人あたり耕地　面積37.8haは全国平均の約24倍
・全国トップクラスの生産量（甜菜、小豆、いんげん豆、スイートコーン、長いも、小麦、ししゃもなど多数）

農家1戸あたりの平均耕地面積



出典:農林水産統計、2005農林業センサス（農林水産省）
Agriculture in the European Union Statistical and Economic Information 2008（EU）

圧倒的な十勝の食料自給率



出典:農林水産省（2006年値）、十勝総合振興局

●研究開発力

帯広畜産大学、農業大学校、北海道農業研究センター芽室拠点、種苗管理センター十勝農場、家畜改良センター十勝牧場、十勝農業試験場、畜産試験場、十勝圏地域食品加工技術センター、十勝産業振興センター、十勝農協連農産化学研究所、日本甜菜精糖（株）総合研究所など、農業に関する各種研究機関が集積しています。

日本の「食」を支える十勝

十勝は、長い日照時間、きれいな空気や水など、食料生産に恵まれた自然環境をもち、安全でおいしい農林水産物を豊富に生み出す、日本の食料供給基地と言える地域です。十勝のカロリーベースでの食料自給率は1,000%を超え、人口約35万人の地域で約400万人分の食料を生産しています。
十勝産原料を使用した商品は高い評価を受け、また十勝には食品加工施設や農業系の大学・試験研究機関が集積するなど、十勝は日本の「食」の基盤を支えています。

今だからこそ、フードバレーとかちに取り組む

経済のグローバル化、少子高齢化社会の到来、震災によるサプライチェーンの変化など、地域を取り巻く環境は大きく変化しています。
このような状況の中、地域の活性化のためには、自らの意思と責任に基づき地域経済を確立していくことが必要です。十勝が持つ「価値」を再認識し、「食」と「農林漁業」を柱とした経済活動を行うための旗印として、「フードバレーとかち」を掲げ、オール十勝で取り組んでいます。

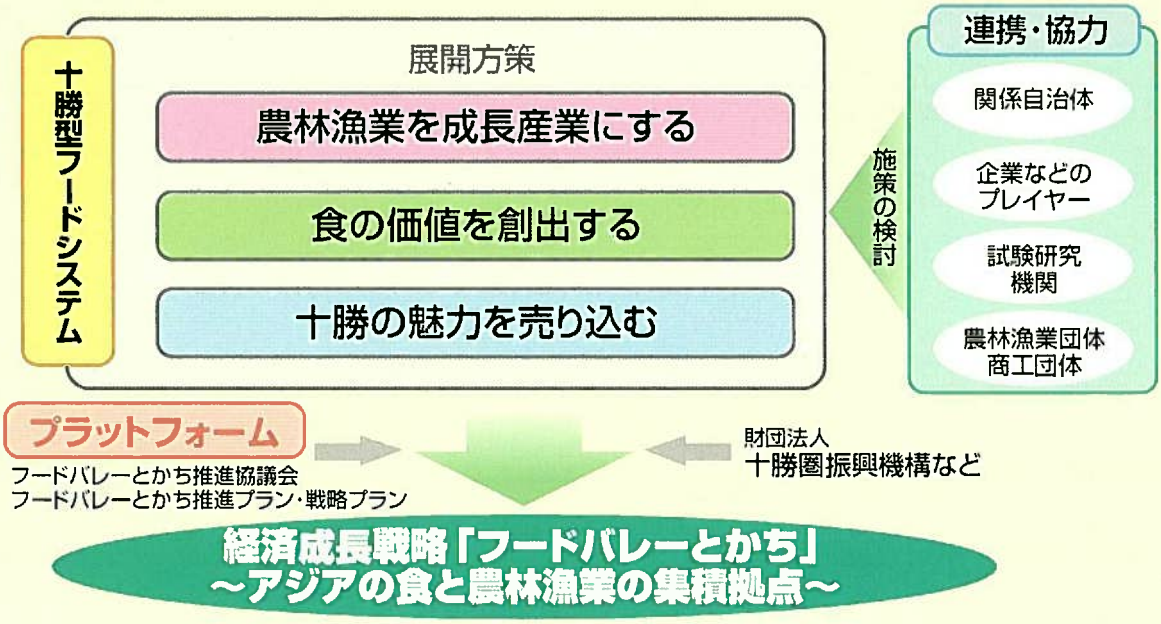
フードバレーとかちで、アジアの拠点を目指す

フードバレーとかちでは、十勝の優位性を活かすための方向性として、三つの展開方策で進めます。

○**「農林漁業を成長産業にする」**　○**「食の価値を創出する」**　○**「十勝の魅力を売り込む」**

三つの取り組みが連携し、日本を代表する大規模畑作酪農地帯・原料生産基地という背景を活かした、生産・加工・流通・販売が結びついた十勝型のフードシステムを、オール十勝でつくりあげていきます。
そのために、十勝で安全・安心な農林水産物を生産し、地元で加工することで付加価値をつけ、十勝のブランド力を活かし、国内外へ販路を拡大していきます。

社会の成熟化や人口減少などにより、国内市場は年々減少傾向にありますが、アジア市場は拡大が続いています。フードバレーとかちを推進し、国内のみならず国外市場にも目を向けながら、十勝をアジアの食と農林漁業の集積拠点を目指していきます。



十勝毎日新聞　（昭和27年8月1日第3種郵便物認可）　©十勝毎日新聞社2011

2011年（平成23年）7月15日 金曜日

追跡！十勝産 1

昨年、1万頭を超える十勝生まれの生後10カ月前後の子牛（素牛）たちが、津軽海峡を越えて本州、九州などに渡った。米沢、松阪、飛騨…日本各地の産地で肥育され、「ブランド和牛」として出荷される。十勝の子牛市場の販売頭数は全国4位。「和牛の味」を支える全国有数の地域なのだ。

素牛（上）

有名産地で「ブランド」に

丈夫さが魅力

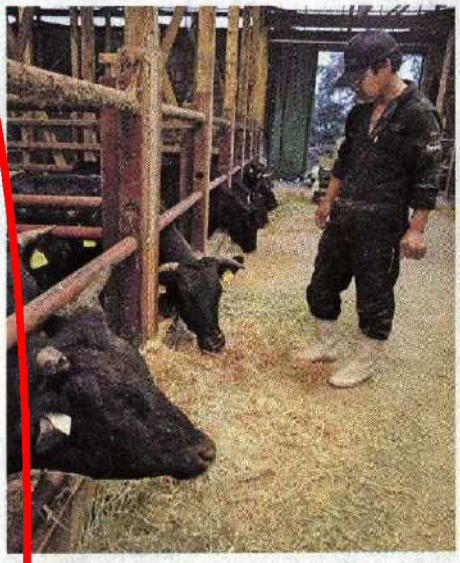
山形県米沢市南部の山間地を訪ねた。「米沢牛」生産・販売ではトップクラスの米澤佐藤畜産（佐藤秀彌代表）が25棟の牛舎で約850頭を肥育していた。牛の約半数が生後10カ月まで十勝で育ったものだ。

米沢牛は松阪、神戸、近江と並ぶブランド力を持つ。米沢市近隣の「置賜（おきたま）三市五町」に居住し、米沢牛銘柄推進協議会が認定した生産者の登録済み牛舎で肥育されたものを指す。18カ月以上継続して飼育することなども条件だ。

「霜降りのきめ細かさは口の中でとろけるようで、食べたときに感動を味わえる牛肉」（同協議会）。生産者たちは品質に自信を持つ。

同社の担当者は10年以上前から毎月十勝の子牛市場に足を運ぶ。昨年度は約300頭を米沢に連れてきた。

「丈夫なところ」。佐藤代表が語る十勝生まれの魅力だ。他の産地の牛は寒い米沢の冬に体が合わず、食欲が落ちて弱ることがあるが、十勝生まれにはそれがない。佐藤代表は「胃袋がそれなりにしっかりしている」と感じている。



米澤佐藤畜産の牛舎。十勝生まれの和牛が数多く肥育されている

ここでは生後35カ月（米沢牛一般は32カ月）まで肥育した和牛を米沢牛として世に出す。手塩にかけて仕上げた牛肉は同社の本社店頭とインターネットで小売りしているほか、大手ギフト業者も取り扱っている。

昨年の十勝市場販売頭数は約1万5000頭。およそ8割が他都県に出荷された。ホクレンによると①東京（2043頭）②長崎（1873頭）③茨城（1732頭）―が上位（販売先の本社所在地のため、肥育地域とは一致しない）。図で示した有名ブランド以外でも、「あしたか牛」（静岡）「花園牛」（茨城）などの地域ブランド牛として育てられている。

十勝から約1600キロ離れた佐賀県多久市にも十勝生まれの和牛たちがいた。1000頭以上を肥育している森山牧場（森山重孝代表）では3分の1が十勝生まれ。八幡岳（764メートル）の麓で伸びと育っている。

同牧場は独自ブランド「森山牛」を生産する。牧場直営の焼き肉店「焼肉森山」（小城市1店舗、佐賀市3店舗）は地元では「焼き肉と言えば森山」というほど知名度が高い。「佐賀市で知らない人はいない」と地元の会社員宮原佐知さん（36）が説明してくれた。これらの店舗で肉の販売も行っているほか阪急百貨店（大阪）などでも買うことができる。

「他の市場に比べて出てくる血統が多彩で頭数も多い。自分の目に合ったものを選びやすい」。森山代表も15年以上前から十勝市場に参加し、毎月30頭前後を購入している。

九州では沖縄で買い付ける肥育農家が多いが、「沖縄産を鹿児島経由の陸送ルートで運ぶより、北海道からの方が早い。沖縄は4日かかるが、北海道は3日で到着する」（森山代表）。北海道と九州。遠距離ではあるが、輸送にハンディはないのだ。

10年でほぼ倍増

この10年ほどで十勝での素牛生産はほぼ倍増し、十勝の存在感は大きくなった。一方で、各地の肥育農家から「ここを改善してほしい」という指摘も出ている。素牛の「ブランド」を確固としたものにするための課題も数多い。

◇

食料自給率（カロリーベース）1100％の十勝。豊かな大地で育つさまざまな「素材」は、全国各地で姿を変えつつ、日本の食を支えている。代表的な十勝の産物を追跡し、実態や課題を探った。

（関根弘貴）

農業から「食業」へ　年間キャンペーン第2部

農業から「食業」へ　年間キャンペーン　第2部

追跡！十勝産 4

小豆

こだわり和菓子の生命線

いちご大福誕生に

「あんは和菓子店の生命線。理想の味を出すには十勝小豆は不可欠だ」。いちご大福開発で知られる東京・住吉町の人気和菓子店「玉屋」の大角和平社長（59）は断言する。

和菓子店は全国に約3万軒ある。全国和菓子協会によると、9割が北海道産小豆を使用し、うち十勝産は4割に達する。

「お客さんの裾野の広いまちの和菓子店が十勝小豆を認めていることが、高い評価につながっている」と同協会の藪光生専務理事は解説する。

いちご大福誕生にはエピソードがある。1985年に初めて商品化した大角社長は試行錯誤を繰り返し、イチゴの味に負けない十勝小豆のつぶしあんにたどり着いた。「当初はインパクトが強く、『食べられるの？』と聞かれた」と苦笑するが、今や世界に紹介されるまでになった。

アイスクリームのハーゲンダッツ・ジャパンも2007～10年春に発売した「小豆ミルク」で十勝産を選択した。「さまざまな小豆を取り寄せた結果」（同社広報）という。

全国から熱い視線が注がれている十勝の小豆。産地での状況はどうか。

作付け自体は全道では減少傾向だ。年間9万トン以上、豆換算では3万トンにもなる輸入加糖あんの影響も大きい。しかし十勝の作付けは、ほぼ横ばい。存在感はさらに増している。

「相場では道内の小豆は、昔から『十勝物』と、それ以外の『中間物』。呼び方から違う」（雑穀卸「丸勝」の梶原雅仁社長）。十勝小豆の評価は品質の高さに尽きるわけだが、生産者、卸業者の努力が欠かせない。「見た目、味、色などいろいろな顧客ニーズに応えることに力を注いでいる」と山本忠信商店の増田貴行営業部雑穀課長は言う。また卸業者は、産地と和菓子店などの懸け橋として、生産者が発言できる場所をつくったり、和菓子関係者を生産現場に招き交流をしたりと、信頼関係構築に努めている。

好循環も生まれた。東京・新橋の新正堂は十勝小豆の品質向上に合わせ、8年前からあんの製造方法を変えた。含有が少なくなった小豆のあくを抜かずに煮ることで風味を最大限に引き出し、売り上げは倍増した。

「産地が頑張っているのだから、こちらも変わらなければ」。渡辺仁久社長（59）はこう話した。

産地証明書発行を

ただ、十勝がもう一段上を目指すための注文もあった。

「差別化するため、十勝で産地証明書を出してほしい。客は産地に興味があり、十勝小豆のこだわりが伝わりやすい」と大角社長は注文する。同店は高級豆・丹波大納言小豆（兵庫県）の産地証明書を飾るが、「十勝」の文字は見当たらない。十勝小豆を使いながら原材料に「北海道産」と記載している店も多い。

いないものがある。過乾燥・過熟は色むらが出て、煮えむらにつながる。鼓亨務理事の指摘だ。

十勝産の品質向上、ブランド化への取り組みは、日本の小豆文化、甘味文化につながる。

（池谷智仁、植木康則）

十勝産小豆を使ったいちご大福を手に持つ玉屋の大角社長（上）と十勝産の品質を生かした和菓子を示す新正堂の渡辺社長

＜メモ＞小豆の2009年産道内作付面積は、2万3500ヘクタール。うち十勝は1万2523ヘクタールで、53・3％を占める。十勝の作付けは3年連続で拡大している。収穫高は、全道4万6500トンに対し、十勝は2万7331トンで58・8％だった。十勝以外は、戸別所得補償制度で大豆へのシフトが加速すると予想される。十勝は4輪作体系に組み込まれており、作付面積が大きく変動しないという事情がある。

「にお（刈った小豆を積み重ねたもの）を積む生産者が少なくなった。適切な時期に収穫して

農業から「食業」へ　年間キャンペーン第2部

追跡！十勝産 5

生乳

カルピス復活 陰の主役

年間100万トン超も 飲用わずか7％

大手乳酸菌飲料メーカー「カルピス」の生産拠点、群馬工場（群馬県館林市）。4年前、視察研修で訪れた管内JAの酪農担当者は、工場内に積み上げられた脱脂粉乳の袋に目が留まった。見覚えのある「よつ葉」のマークに、「うちらの製品だ」と喜ぶ声が上がった。

同社の主力商品「カルピスウォーター」「カルピスソーダ」には、よつ葉乳業十勝主管工場（音更）を主体にした道産の脱脂粉乳が使われている。ただ酪農家やJA関係者も加工先までは知らないことが多い。流通現場を知ってもらおうと、よつ葉乳業が研修を企画した。「実際に袋を見て、本当にここまで来ているんだと思った」。参加したJA豊頃町の竹山幸雄畜産部長（57）は当時の感激を振り返った。

酪農王国・十勝。2010年度の生乳生産量は、約106万トンで、4年連続で100万トンの大台を超えた。全国の半分を生産する北海道の中で、3割近いシェアを占めている。

このうち飲用になるのはわずか7％。残りは菓子原料のクリームやチーズ、脱脂粉乳などの加工用向けだ。飲用の比率は全道で18％、全国では54％に上るだけに、大都市圏などの消費地から離れた十勝の生乳は、多くが加工向けに使われていることが分かる。中でもよつ葉乳業は業務用がメーンで、十勝主管工場に運び込まれた生乳の多くが脱脂粉乳や生クリームなどに加工され、本州の食品メーカー、飲料メーカーに納めている。

その代表的な例がカルピス。「カルピスは国産原料にこだわった会社。十勝は大変重要な産地です」。東京恵比寿の本社で、上野峰広乳製品事業部長は、いわばカルピス復活の陰の主役といっていいだろう。

カルピス群馬工場の「カルピスウォーター」製造ライン。十勝産脱脂粉乳が使用されている（カルピス提供）

濃縮タイプのカルピスは、工場周辺の本州の酪農家から集荷した生乳を使うが、他の乳製飲料の多くに脱脂粉乳が用いられ、その約8割をよつ葉が供給している。

カルピスウォーターは、濃縮タイプより乳のたんぱく質の粒が小さく、時間がたっても沈殿しないのが特徴。よつ葉製は粒の大きさが安定しているほか、乳酸菌成分の生産効率が良く評価されている。

20年前、他メーカーとの競合で苦戦した同社は、カルピスウォーターの大ヒットで業績をV字回復させた。国際相場の高騰や国産原料が不足する中でも、供給を続けてきた主産地の十勝への期待は大きい。十勝産生乳は、いわばカルピス復活の陰の

内外の評価高く 加工で広く使用

カルピス以外でも内外の評価は高い。脱脂粉乳だけみても、ヤクルトの各製品や日本たばこ（JT）の缶コーヒー「ルーツ」などに幅広く使用され、よつ葉の「十勝工場」を指定するメーカーもある。

酪農業は牛乳の消費減退に直面している。酪農家が所得拡大のために増産しても、過剰在庫を増やし、乳価引き下げを招く―こうした悪循環が懸念され、「余剰乳」対策としてもナチュラルチーズ加工など高付加価値化の取り組みが進むが、本州では離農や担い手不足で生産基盤が弱体化している。

品質が高く供給量が安定した十勝産生乳は乳製品市場の中でシェア以上の重要な位置を占めている。カルピスの上野部長はこう強調した。

「（十勝から）安定的に供給してくれることが心強いんです」

（安田義孝）

＜メモ＞酪農家で搾られ、殺菌や加工を施していない牛乳は「生乳」と呼ばれる。乳業工場で牛乳やチーズ、バターなどに加工されるうち、生乳から脂肪分をほぼ全て抜き取った脱脂乳を粉末にしたのが脱脂粉乳。ヨーグルトなどの発酵乳や乳酸菌飲料、アイスクリームなどに使われている。生乳の価格（乳価）は、用途別に異なり、最も高い飲用向け（牛乳向け）が1キロ当たり109・4円に対し、脱脂粉乳など加工向けは同67・96円と安い。

農業から「食業」へ　年間キャンペーン　第2部

追跡！十勝産 7

ジャガイモ

安定供給で「産地」強調

きつね色をした円形のコロッケが次々と姿を現し、パック詰めされていく。帯広から車で30分、士幌町の市街地への入り口にあるJA士幌町の食品工場（士幌西2線146）では、冷凍食品大手のニチレイ（東京）の関連会社ニチレイフーズの委託を受け、冷凍コロッケを製造している。工場では約400人が昼夜交替で働いている。

ニチレイの主力「牛肉コロッケ」

主力商品の「衣がサクサク牛肉コロッケ」は、1994年に発売された。開発に約3年をかけた。電子レンジで加熱するだけで食べられる。販売量は非公開だが、同社の売り上げトップ10に入る。道内から沖縄まで全国のスーパーなどに出荷される。

パッケージで目を引くのが「北海道十勝産」「十勝地区5農協限定」の文字だ。「消費者は実際に訪れたことはなくても、ジャガイモ＝十勝というイメージが強い。これが十勝産ジャガイモのブランド力」とニチレイ広報IR部広報担当課長の岡田充功さんは話す。同社は業務用コロッケでも十勝産を表示した主力商品を展開している。

JA士幌町食品工場で製造される冷凍コロッケ

ニチレイの「衣がサクサク牛肉コロッケ」。パッケージには「十勝産」「十勝地区5農協限定」の文字が

社団法人日本冷凍食品協会によると冷凍食品の国内生産量でコロッケは1位を続ける。2010年産は16万3139トン（全体の11・7％）。冷凍食品の看板商品で、大手ナショナルブランドが「十勝産」を強調できるのは、生産地が原料の安定供給を果たしているからだ。提供5コロッケ、ポテトチップなど用途別に品種も変え、常に3年後の計画を立てながら作付けしている。同JA木野以外の4農協は種イモから生産、徹底した計画生産を続けている。

農協（士幌町、上士幌町、鹿追町、おとふけ、木野）は、士幌馬鈴薯（ばれいしょ）施設運営協議会を設置。秋に収穫したジャガイモを工場横の倉庫で貯蔵、年間を通じて加工している。

「使用目的に沿った計画生産で、生産者の協力を得て安定供給できる」。JA士幌町の七條光寛農産部長は胸を張る。同協議会は1973年の設立以来、生産者に産地のアピールが難しいという事情を抱えている。全国メーカーの場合、製造量が多く、不作の場合の品不足のリスクは大きい。十勝が主産地でも、代替産地産使用に備え「道内産」「国産」と製品の表記は幅を広げておくのが実情だ。生産地側も「大手製品の場合は波及力も大きい分、何かあった場合の影響も大きい」（ある管内JA幹部）と産地表示には慎重だ。加工用ジャガイモは行方が見えにくい作物でもあるのだ。

「生産地のすぐ近くで年間を通じて100％地元産を加工する工場は十勝では珍しい」（七條部長）―それだけにJA士幌町の食品工場の存在は大きい。

「製造量が多いので品質維持には特に気を使うが、十勝産を打ち出すので責任感は強い」。同工場調理食品部の佐藤伸也部長は言葉に力を込めた。

（原山知寿子）

4割弱が加工用　行方見えにくく

全国のジャガイモ作付面積の3割弱を占める十勝。このうち約4割が加工用だ。実は加工用

〈メモ〉十勝総合振興局によると、2008年度の管内のジャガイモの作付けは2万3000ヘクタール、収穫量は87万3800トン。作付面積では全道の42％、収穫量は41％を占める。用途別では加工食品用が38・6％で最も多く、次いで生食用の29・1％。

ニチレイフーズ以外ではカルビーも十勝産ジャガイモ9万トン（09年度）を加工用に使用、管内に2工場（帯広、士幌）がある。